

(地Ⅲ126F)

平成23年9月8日



都道府県医師会・郡市区医師会
感染症危機管理担当理事 殿

日本医師会感染症危機管理対策室長
保坂 シゲリ

不活化ポリオワクチンの導入に関する新聞報道について

9月7日付産経新聞において、不活化ポリオワクチンが来春から導入される
との誤解を招く報道がなされたことから、別添のとおり厚生労働省健康局結核
感染症課から都道府県衛生主管部（局）宛事務連絡がなされました。

不活化ポリオワクチンについては、早ければ平成24年度中にDPT（ジフ
テリア・百日せき・破傷風）との4種混合ワクチン（DPT-IPV）が導入
されることも想定されていますが、平成24年度当初からの実施は予定されて
いないとしております。

つきましては、貴会におかれましても本件についてご了知いただきますよう、
よろしくお願い申し上げます。

小郡三井医師会より

予防接種担当理事 松行眞門
会長 蒲池 壽

事 務 連 絡
平成 23 年 9 月 7 日

各都道府県衛生主管部（局） 御中

厚生労働省健康局結核感染症課

不活化ポリオワクチンの導入に関する新聞報道について

予防接種行政につきましては、日頃よりご理解ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、9月7日付けの一部の新聞において、不活化ポリオワクチンが来春から導入されるとの誤認を招く報道がなされました。

不活化ポリオワクチンの導入に向けてのスケジュールは、8月31日に開催された「不活化ポリオワクチンの円滑な導入に関する検討会」の資料（別添1）においてお示ししているとおり、現在、複数の企業により不活化ポリオワクチンの開発が進められており、本年末頃より順次薬事承認申請がなされる予定です。このため、早ければ平成24年度中にもDPT（ジフテリア・百日せき・破傷風）と不活化ポリオワクチンとの4種混合ワクチン（DPT-IPV）が導入されることも想定されますが、平成24年度当初からの実施は予定しておりません。

現在、予防接種法に基づいて、経口生ポリオワクチンの接種が勧奨されているところであり、その実施を継続するとともに、接種に関する住民への周知に当たって遺憾のないよう、管下市町村への周知方お願いいたします。

参考

9月7日付けの報道

<http://sankei.jp.msn.com/life/news/110907/bdy11090707420002-n1.htm>

わが国における不活化ポリオワクチンの開発経緯

【DPT-IPV4種混合ワクチンの開発】

平成14年

国内4社によるジフテリア・百日せき・破傷風・
不活化ポリオの4種混合ワクチン(DPT-IPV)の開
発の検討開始

一般財団法人 化学及血清療法研究所
学校法人 北里研究所(平成23年4月1日より北里第一三共ワクチン
株式会社)
武田薬品工業株式会社
一般財団法人 阪大微生物病研究会

・厚生労働省から早期開発に向けた要請・助言を継続的に実施
・平成22年4月 国内4社に対し、厚生労働大臣政務官から、
一層の開発の促進の努力をお願いする文書を発出

平成23年末頃より

順次、薬事承認申請がされる予定

【単独(単抗原)ワクチンの開発】

(財)ポリオ研究所による

平成10年

第1相臨床試験の実施

平成13年

製造承認申請

平成17年

GCP(医薬品の臨床試験の実施の基準)上の
問題等により承認申請の取り下げ

【単独(単抗原)ワクチンの開発】

サノフィパスツール株式会社による

平成23年5月27日 開発を決定

できる限り迅速に薬事審査を実施

早ければ平成24年度中にも4種混合ワクチン(DPT-IPV)の導入

4種混合ワクチン(DPT-IPV)の導入から近い時期を目指した単抗原IPVの導入

OPV: 経口生ポリオワクチン(Oral Poliomyelitis Vaccine)
IPV: 不活化ポリオワクチン(Inactivated Poliomyelitis Vaccine)

保護者や医師困惑、再流行の恐れも

定期接種の生ワクチンか、自費での不活化ワクチンか、それとも来年まで待つ。自治体で秋のポリオ予防接種が始まる中、対象年齢の乳幼児（3カ月～7・5歳）を持つ保護者には悩ましい問題となっている。国は早ければ来年度中に不活化ワクチンを組み込んだ4種混合ワクチンを導入する予定だが、今秋のワクチン接種をどうするかは保護者が判断するしかない。保護者から相談を受ける小児科医や自治体担当者も「今の情報だけではアドバイスが難しい」と困惑している。（平沢裕子）

広がる接種控え

鹿児島市ではこれまで常に9割以上だったポリオの接種率が、今春は7～8割に下がった。同市内の小児科医は「今年の初め頃から、保護者からポリオワクチンについての相談が増えた。自費で不活化ワクチンを接種したいというお母さんもいるが、未承認のワクチンを接種して何かあったときのことを考えると勧めにくい。やはり、4種混合

ポリオワクチン「生」か「不活化」か、来年まで待つか

子供の太ももにポリオの不活化ワクチンを接種する小児科医。来年度から不活化ワクチンを組み込んだ4種混合が導入される見込みで、今秋の接種を迷う保護者は多い。—東京都渋谷区



生ワクチンと不活化ワクチン

生ワクチンはウイルスの毒性を弱めてつくる。経口接種

で、免疫効果は強く、長期間にわたる免疫ができるが、ごくまれに接種者にポリオを発症させることがある。一方、不活化ワクチンはウイルスの毒性を無くしてつくる。生ワクチンに比べて免疫効果は弱く、免疫をつけるためには注射で3回以上の接種が必要だが、ワクチンによるポリオの発症はない。不活化ワクチンは自費で、3回接種で1万3500円程度。

に間もなく切り替わるとすれば、今秋の生ワクチンを積極的に勧めにくい」と頭を抱える。

保護者からの問い合わせが多いのは自治体も同じだ。今春の接種率が約8割だった東京都調布市にも、「生ワクチンと不活化はどっちがいいのか」「不活化が定期接種になるまで待ちたいが大丈夫か」などの相談が寄せられている。同市は対象者には来年度中に不活化ワクチンに移行することを通知。そのうえで、生ワクチンを希望する保護者には秋のポリオ期間（9～11月）で2回の接種を勧めている。同市福祉健康部健康推進課

は「春から接種控えが始まっている。今秋の接種率はさらに下がる可能性があるが、来春から切り替わるとすると、急いで接種するよう勧めにくい」と話す。

推定で15万人にも

定期接種の接種率が全国で2割低下した場合、対象でありながら接種しない乳幼児は約20万人に上る。ワクチン輸入会社によると、この1年で輸入された不活化ワクチンは約15万本。1人が3回接種したとすれば約5万人が自費で接種していることになり、定期接種も自費接種もしていないのは約15万人と推定される。

接種控えは、保護者一人一人が悩んで選択した結果ともいえる。しかし、ワクチンを接種せずに免疫のない子が増えることは、海外から持ち込まれたウイルスで発症者が出るリスクが高まることにもなる。

国立感染症研究所感染症情報センターの岡部信彦センター長は「ポリオを根絶した中央アジアのタジキスタンで昨年、海外から入ってきたポリオウイルスが流行し、死亡者も出た。ワクチン接種をしない選択をする人が増えれば、日本でも同じことが起こる可能性がある。日本の子供をポリオから守るために、社会としての免疫を保つことは大事。ワクチンを接種しないことは最悪の選択であることを知ってほしい」と訴える。